

A photograph of a bamboo forest with a central text overlay. The bamboo stalks are dark and vertical, set against a ground covered in brown pine needles. The text is arranged vertically in a central column.

古今・新古今集の花

カラー版 古典の花

文／松田 修

カラー版 古典の花  
古今・新古今集の花

昭和五十七年八月一日発行

著者 松田 修◎

発行人 石原明太郎

発行所 (株)国際情報社

発売元 (有)光書房

〒150 東京都渋谷区東一―二八―六  
電話〇三(四〇七)六一四六  
振替 東京五―三六五四八

印刷所 (株)国光印刷

定価 一六〇〇円

© OSAMU MATSUDA

1982  
Printed in Japan

松田 修(まつだ・おさむ)

一九〇三年、山形県に生れる。東京大学農学部卒業。社団法人「日本植物友の会」会長。専攻は植物文化史。著書に『万葉植物新考』『植物の旅』『植物と伝説』『花と文学』『花(はな)』『植物世相史』『花の文化史』『古典植物辞典』『秋の百花譜』『冬の草木譜』など多数がある。  
現住所／東京都世田谷区砧二七―二二

ISBN4-89322-146-9

●落丁・乱丁本はお取替いたします。

カラー版 古典の花

# 古今新古今集の花

文・松田 修

国際情報社

カラー版 古典の花

# 古今・新古今集の花

— 目次 —

## 春

うめ	6	からもも	18	よもぎ	26
さくら	8	すもも	20	わらび	26
やへざくら	11	なし	21	すみれ	28
かにはざくら	12	やまなし	22	さうび	30
つばき	14	やなぎ	23		
やまぶき	15	ふぢ	24		

## 夏

たちばな	32	なら	45	ゆふがほ	56
うのはな	35	くちなし	46	くれなる	57
あふち	36	ふかみぐさ	48	むらさき	59
かつら	38	あやめぐさ	50	まこも	61
かしは	41	あふひ	52	あし	62
きり	42	とこなつ	53	わすれぐさ	65
かぢ	44	なでしこ	54	しのぶぐさ	66

## 秋

もみぢ	68	いね	77	ふぢばかま	85
まゆみ	70	すすき	78	をみなへし	86
やまがき	71	くず	79	きく	88

索引  
古今集・新古今集の植物

141 135

あかね 114  
あさ 114  
あづき 115  
あをつづら 116  
いはつづじ 117  
うきくさ 117  
かはなぐさ 118  
くたに 119  
からはぎ 119

くるみ 120  
さがりごけ 120  
すが 121  
ぬなは 122  
ははきぎ 122  
はじ 123  
ははそ 124  
ばせを 125  
はなかつみ 126

ひさぎ 127  
みちしば 128  
みる 128  
むばたま 129  
めど 131  
やまし 132  
やへむぐら 133  
ゆふ 134

雑

まつ 95  
ひ 95  
すぎ 96  
まき 98  
をがたまのき 98  
びは 100

しきみ 101  
さかき 102  
やまたちばな 103  
やまある 103  
こけ 104  
ひかげぐさ 106

たけ 106  
ささ 108  
しの 109  
くれたけ 110  
にがたけ 111  
かはたけ 111

冬

まさきのかづら 72  
かるかや 73  
をぎ 74  
あざぢ 76

おもひぐさ 80  
りうたん 80  
はぎ 82  
きちかう 84

しをに 89  
あさがほ 90  
つきくさ 92

## はじめに

『古今和歌集』及び『新古今和歌集』は、日本の代表的古典文学として、古来、数多くの解説書や注釈書があるが、しかし、そこに登場する植物や花についての研究や文献は見当らない。

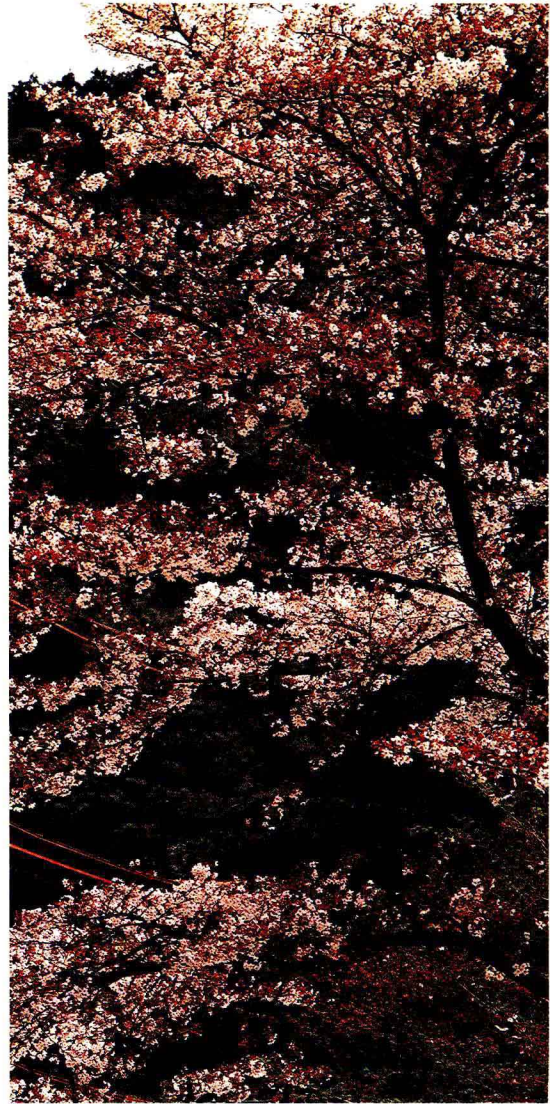
それらの研究はなぜ必要なのか、それはいうまでもなく、『古今和歌集』『新古今和歌集』は、春・夏・秋・冬と部立ぶたてを施し、意識的にその変化に息吹を求めようとした歌集であって、そこに大きな特色と価値が認められるからである。

もつとも、四季の変化を知らせるものは必ずしも花や植物ばかりではないが、それを最も敏感に感じさせるのは、やはり花や植物であるといってもよく、二つの歌集に数多くの花や植物が登場しているのも、これを物語っているというべきであろう。『古今・新古今集の花』は、この見地に立ち、改めて『古今和歌集』と『新古今和歌集』の美を発見し、考えてみようとするものであるが、これにあたり、両歌集に現れた植物を整理統合し、便宜上、春・夏・秋・冬・雑の五グループに分け解説を試みることにした。なお、岩波版の日本古典文学大系『古今和歌集』（佐伯梅友校注）、同じく『新古今和歌集』（久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注）を底本としたのでおことわりしておく。



さくら

春



## うめ 梅

ウメ(ばら科)

〔古今集〕

きみならで誰にかみせん梅花  
色をもかをもしる人ぞしる

とものり(巻一―三八)

春の夜のやみはあやなし梅花

色こそみえねかやはかると、

みつね(巻一―四一)

ひとはいさ心もしらずふるさは

花ぞむかしのかににほひける

つらゆき(巻一―四二)

雪ふれば木ごとに花ぞさきにける

いづれを梅とわきておらまし

紀とものり(巻六―三三七)

〔新古今集〕

梅がえに鳴きてうつろふ鶯の

羽しろたへに淡雪ぞふる

読人不知(巻一―三〇)

大空は梅のほひに霞みつ、

くもりもはてぬ春の夜の月

藤原定家朝臣(巻一―四〇)

あるじをば誰ともわかず春はたゞ

根垣の梅を尋ねてぞ見る

藤原敦家朝臣(巻一―四二)

梅がかに昔をとへば春の月

こたへぬ影そ袖にうつれる

藤原家隆朝臣(巻一―四五)

散りぬればにほひばかりを梅の花

ありとや袖に春風の吹く

藤原有家朝臣(巻一―五三)

ウメは古今集に、「梅」とあるものが二十六首、「花」と詠ん

でいる歌が二首、計二十八首あり、新古今集では「梅」は二

十五首、「花」は二首の計二十七首が現れている。古今集では、

サクラ、モミジに次いで歌数から第三位、新古今集では、サ

クラ、マツ、モミジに次いで第四位を占めて大部分は巻一の

「春歌上」に集まっているが、古今集では「冬歌」「賀歌」「物

名」「哀傷歌」「雑体」にも現れ、また、新古今集では「恋歌」

「雑歌」「神祇歌」にも現れている。

ウメは『万葉集』では、文化人達には異国的な情緒のただ

よう風流の場であったが、平安時代になると一般に普及し、

早春の花として愛賞されていることが知られる。約束事によ

うに「梅に鶯」「梅に雪」という歌が多く、新古今集の巻一―

四〇、四五のように、春の夜の月に配したウメも現れている。

古今集の「きみならで誰にかみせん」(巻一―三八)という紀

友則の作品は、ウメの名歌として知られているし、紀貫之の

「ひとはいさ」(巻一―四二)という歌は「初瀬寺の梅」とし

て歌物語にも語られている。『万葉集』には、香りを詠んだウ

メの歌は一首しかないが、この時代になるとその色よりも、

むしろ香りがもてはやされ、古今集の巻一―四一の歌「色こ

そみえねかやはかると、」のように、闇の中のウメの花の香

りが賞美されているのも優雅というべく、ウメは、古今集、

新古今集を通じて一層の気品が加えられたといつてよい。







## さくら 桜

サクラ(ばら科)



やまざくら

万葉時代は、花はウメが代表した感じであったが、平安時代になると、まさにサクラの時代で、古今集にはサクラの歌が四十五首、サクラを花と詠んでいる歌十六首、計六十一首あり、新古今集にはサクラの歌四十四首、サクラを花と詠んでいる歌五十六首の、計百首あり、サクラは他の花を圧倒し初めて国花としての面目を躍如させている。

古今集の在原業平（巻一―五三）の歌「みわたせば」とある。この歌はサクラを一途に愛する心を裏返して表出している。素性法師（巻一―五六）の「みわたせば」という歌は、題に「花ざかりに京をみやりてよめる」とあり、当時の京の春景色を美しく詠みあげている。藤原因香（巻二―一八〇）という歌は、春の進み具合を「たれこめて」といふ歌は、春の進み具合をサクラにみた歌であるし、紀友則の、「久方のひかりのどけき」（巻二―一八四）という歌も、サクラの名歌として知られている。「しづ心なく花のちるらむ」という心は、独特の調べを奏でて優美な印象を与える。小野小町の「花の色はうつりにけりな」（巻二―一三）という歌は、散りゆく花を惜しみながら、すでに盛りを過ぎた女の容色の衰えゆく姿への歎きが込められている歌で、これは「小倉百人一首」にも入れられている。

次に新古今集の歌をみると、藤原有家の「山の桜花」（巻一―九八）は、若山牧水の「うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花」というのにも似て、いかにも美しく、伊勢の「み雪にまがひなば」（巻二―一〇七）というのは、まだ現在はそういう状態になっていないのを、見誤るようならばと、散るヤマザクラの美しさを想像した歌である。新古今集の歌には、こういう空想的な観念的な歌が多い。

〔古今集〕

世中にたえてさくらのなかりせば

春の心はのどけからまし

在原業平朝臣（巻一―五三）

みわたせば柳桜をこきませて

宮ぞ春の錦なりける

素性法師（巻一―五六）

たれこめて春のゆくゑもしらぬまに

まちし桜もうつろひにけり

藤原よるか朝臣（巻二―一八〇）

久方のひかりのどけき春の日に

しづ心なく花のちるらむ

きのものり（巻二―一八四）

花の色はうつりにけりないたづらに

我身世にふるながめせしまに

小野小町（巻一―一三）

〔新古今集〕

あさ日かげにほへる山の桜花

つれなくきえぬ雪かとぞみる

藤原有家朝臣（巻一―九八）

山桜散りてみ雪にまがひなば  
いづれか花と春にとはなん

伊勢（卷二一〇七）

又やみんかたのみのみの桜狩  
花の雪散る春のあけぼの

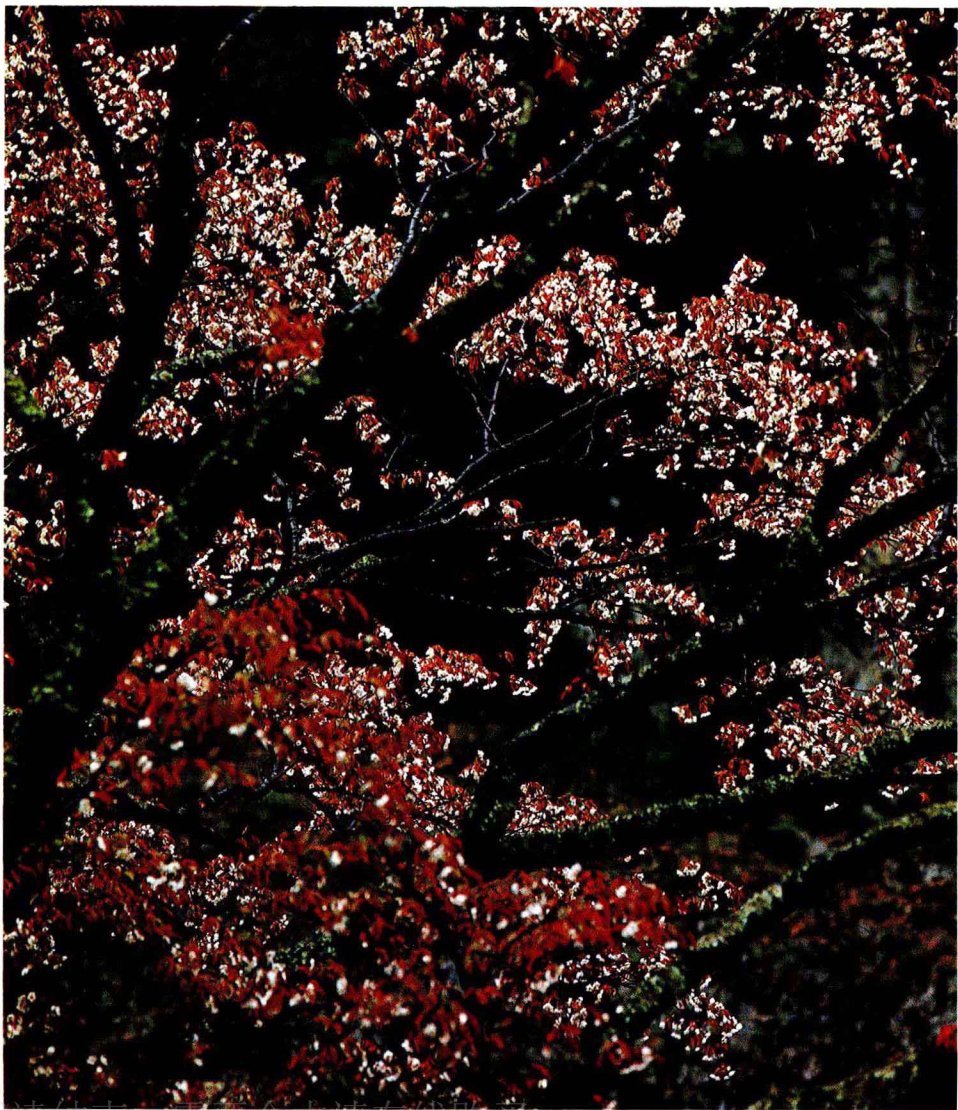
皇太后宮大夫俊成（卷二一一四）

山里の春の夕暮きてみれば

入相の鐘に花ぞ散りける

能因法師（卷二一一六）

俊成の「かたのみのみの桜狩」（卷二一一四）という歌は、ここに初めてサクラの語がでている歌として注目されるもので、河内国の交野は、当時の御狩場として有名で貴人達はサクラを眺めながら楽しんでものらしい。能因法師の「入相の鐘に花ぞ散りける」（卷二一一六）というのが、静かな春のたそがれが偲ばれて、幽玄の世界を展開している。







## やへぎくら 八重桜 ヤエザクラ(ばら科)

万葉時代のサクラは、ヤマザクラが主であったが、平安時代になると、ヤエザクラも歌題となった。

道命法師の歌(巻一九〇)は題に「やへぎくらを折りて、人のつかはして侍りければ」とある。この歌は、古今集の巻六―三三七の歌「雪ふれば木ごとに花ぞさきにける いづれを梅とわきておらまし」(紀友則)という歌を本歌としたものらしく、「しら雲の立田の山の」の「立」は懸詞で、白雲のかかっている立田の山のヤエザクラは、どう区別して折ることできたのであろうか、といった意。立田山は、万葉時代からサクラの名所として知られていた。

式子内親王の歌(巻二一三七)は、題に「家のやへ桜をらせて、惟明親王のもとにつかはしける」とあり、本歌は『源氏物語』の「若紫」の巻にでている「宮人に行きて語らむ山桜 風よりさきに来ても見るべく」に拠ったものらしく「やへにはふ軒ばの桜」とあるから、この頃は、ヤエザクラも植えられていたのであろう。

惟明親王の歌(巻二一三八)は、その「返し」の歌で、ヤエザクラの満開の頃に誘われなかったことを恨んでいる歌である。

このヤエザクラは、もとヤマザクラから変化したもので、枝が太く、葉も大きく広く、花は若葉と同時に咲き、通常大形で芳香がある。古来品種が多く、品種によって白色から濃紅色まである。花期が遅いのも、この花の特徴である。

〔新古今集〕

しら雲の立田の山の八重桜

いづれを花とわきて折りけん

道命法師(巻一九〇)

やへにはふ軒ばの桜うつろひぬ

かせよりさきにとぶ人もがな

式子内親王(巻二一三七)

つらき哉うつろふまでに八重桜

とへともいはで過ぐる心は

惟明親王(巻二一三八)

## かにはぎくら

ヤマザクラの方言(ばら科)

古今集の「物名もののな」の巻に、この「かにはぎくら」というのがでている。遊びの歌としてこの名が現れている。

歌の「かづけども浪のなかにはぎぐられで」とは、水に潜って取ろうとしても、波の中では探り取ることができない。

そのくせ、という意味で、この第二・三句に題の「かにはぎくら」が入れている。「うきしづむたま」は、浮いてみえ沈んで隠れる玉よ。と波の玉を見立てているのである。

このカニハザクラは、カバザクラのことと多くの注釈書にあるが、サクラの種類にカバザクラというものはなく、これはヤマザクラの方言である。農林省山林局編『樹種名方言集』をみると、ヤマザクラの方言として次のようなものがある。

〔古今集〕  
かにはぎくら  
かづけども浪のなかにはぎぐられで  
風吹くことにうきしづむたま

つらゆき(巻一〇―四二七)

カバ  
    || 青森県(東津軽・南津軽・上北・下北・三戸各郡) 岩手県(稗貫郡) 秋田県(北秋田鹿角各郡)

カハザクラ || 宮城県

カバザクラ || 青森県(東津軽・上北・下北各郡) 岩手県

(紫波・和賀・東磐井・岩手・上閉伊・気仙

各郡) 秋田県(山本郡)

カンバ  
    || 青森県(西津軽郡) 岩手県(紫波郡) 秋

田県(南秋田郡) 岐阜県(飛騨地方)

カニハザクラのカニハは、『万葉集』の巻六―九四二に、「桜皮」をカニハとよんでいるように、カニハはサクラの皮のことで、上代は山刀の柄や曲げ物などにこれを用いたことからでた名で、カニハ転じてカンバ、カバ、カバザクラなどの名が生れたものであろう。従ってカニハザクラは以上のようにこれはヤマザクラの方言であるが、時にヤマザクラ系のチョウジザクラにもこの名がある。



かにはぎくら



つばき  
椿

ツバキ(つばき科)

ツバキは、万葉時代はその前期をかざる花として歌にも詠



〔新古今集〕

とやかへるたかのを山の玉椿

霜をばふとも色はかはらじ

前中納言匡房（巻七―七五〇）



つばき

まれ、人にもよく知られた花であるが、古今集にはツバキの歌は一首もなく、新古今集にわずかに一首現れている。

この歌の題に「寛治二年、大嘗会屏風に、たかのを山をよめる」とある。歌の「とやかへる」は、鷹尾山の枕詞で、鷹の羽の抜け替る時鳥屋に返るの意。「玉椿」の玉は美称である。歌は、霜にあつても色は変わらないと、鳥の夕かと山の鷹尾を並べてツバキを加え、賀の歌としたものであるが、ツバキは常緑木で赤い花も美しく、上代からこれは目出度いものとされ『古事記』にも「新菅屋に 生ひ立てる 葉広 五百箇真椿 其が葉の 広がり坐し 其の花の 照り坐す 高光る 日の御子に」などとうたわれているし、『延喜式』には「正月上の卯日に御杖を作りし焼椿十六束、皮椿四束」などとみえる。しかし、ツバキが世にもはやされるようになったのは、徳川時代の寛永の頃からで、平安・鎌倉時代の頃は、まだウメやサクラのように愛賞されていなかったようにみえる。

この頃にツバキと呼んでいたものは、いうまでもなく、ヤブツバキ、一名ヤマツバキで、今のように多くの品種が生れたのは徳川時代以降である。

## やまぶき

山吹

ヤマブキ(ばら科)

ヤマブキは、古今集の「春歌」に五首、「雑体」に一首の計六首、新古今集では「春歌」に五首、「雑歌」に二首詠まれている。いずれも「春歌下」にこれをあげているのは、晩春を飾る花としての部立であろう。

古今集の巻二―二一の歌の「たち花のこじまのさき」というのは、宇治川の沿岸で平等院の近くにあったらしい。巻二―二二の「春雨にほへる色もあかなく」という歌はヤマブキの名歌として知られているもので、まことに優雅な